

「被災地からのメッセージを感じてほしい」と語る三浦寛行さん＝岐阜市神田町、岐阜信用金庫本店



3・11被災地見守り続ける三浦さん(岐阜市)写真展

震災8年 復興問う

にぎわう釜石 なお仮設暮らしの人も

54時系列で「岐阜の人へメッセージ」

東日本大震災の被災地を撮り続けているカメラマン三浦寛行さん(50)＝岐阜市鷺山＝の写真展が29日、同市神田町の岐阜信用金庫本店で始まった。3月29日まで。年に3、4回被災地を訪問し、毎年この時期に写真展を開く三浦さんだが、震災から8年となる今年の展示では伝える難しさを感じているという。

(舌間隆博)

◇「今年は『復興』をどのよう
に捉えればいいか悩んだ。ラグ
ビーW杯の舞台「釜石鵜住居復興
スタジアム」(岩手県釜石市)
と、完成した巨大な防潮堤を1
枚に収めた写真の前で、三浦さ
んはつぶやいた。一見、写真が伝
えているのは、9月にW杯の開
幕を控える元気な町の姿だ。

だが、被災地に通う三浦さん
にとっては、複雑な光景でもあ
る。「まだ釜石市には仮設住宅
から学校に通う子どもたちもい

るし、スタジアムと防潮堤の間
は原っぱのまま。経済力のある
人は高台に家を移したが、そ
うでない人は」。復興する現場
と、取り残された人々。両者を
知るからこそ、悩みは深い。

同県陸前高田市は巨大なベル
トコンベヤー、通称「希望のか
け橋」で土を運んで盛り土をし
たが、住民の多くが高台に移転
するなどしたため、かさ上げ地
の約6割が利用方針未定だとい
う。三浦さんは現場を撮影した
写真の説明文に「何のために、
誰のために、巨額の税金を投じ
て盛り土をしたのだろうか？」
など書いた。「もどかしさ、
むなしさ…。複雑な思いがある」
と思いを語る。

写真展では、1年分の写真6
枚をパネル1枚にまとめ、震災
発生直後から時系列に展示して
いる。パネルは計9枚となった。
「長い目で見ると、さまざま
難しい問題が出てくる。南海ト
ラフ巨大地震が懸念される岐阜
の人にも、被災地からの重いメ
ッセージとして受け取ってほし
い」と力を込めた。